

「タ」が表す過去とその解釈における効果

住 大 恭 康

(受付 2005年10月21日)

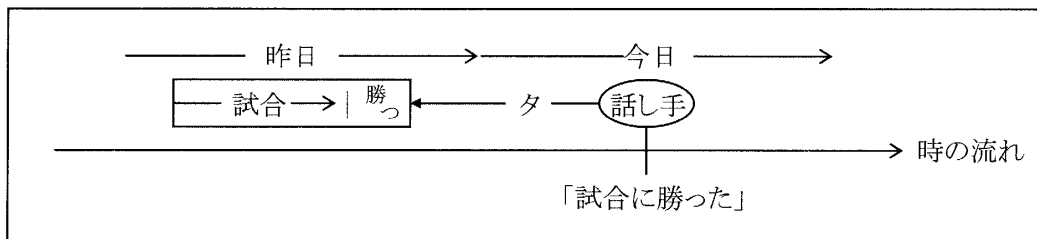
0. はじめに

日本語のタは、一般に過去を表す助動詞と考えられているが、日本語研究では過去を表さないタの用法が指摘され、その解釈がさまざまに議論されている。そして、研究者によっては、タにはテンスだけでなく、アスペクトやムードを表す用法があるととらえている。ところが、「標準的」な日本語においては、タが過去を表しているとみなして解釈を説明することができない例はほとんどないように見受けられる。また、タが過去を表すと想定されるからこそ、多様な解釈が生じると考えることもできそうである。そこで、本論文では、タが表すのは常に過去であると仮定し、過去に位置づけられるものが何であるか、また、それが過去に位置づけられることによってどのような効果が現れるかについて検討する。その際、タの意味自体ではなく、解釈の枠組みを柔軟にとらえる説明を展開することになるが、この方法は、認知的にも、日本語教授法的にも有効であろうと考える。なお、本論文では、従属文中に現れるタを考察の対象からはずすことをあらかじめ断っておく。

1. 通常の過去

明らかに過去を表すと考えられるタに関しては、特に検討する必要もないであろうが、以降の議論において使用する表示方法を説明するために一つ例をあげておく。

(01). 昨日試合に勝った。



この表示は、矢印（→）が「時の流れ」を示し、「昨日」という時間内で、「試合」が始まり、その「試合」が終わり、終わった時点で「勝つ」という結果が生まれたことを表している。そのような事象は、「今日」に位置づけられる発話時の「話し手」から見て過去¹であるため、指示を表す矢印

(→)に「タ」が付与されている。これを言語化すれば、「試合に勝った」と言える。もちろん、クリケットのように数日かかる試合であれば、「昨日」以前に試合が始まっているであろうが、その場合にも、試合は「昨日」に含まれている必要がある。また、「昨日」投票が行われ、開票結果が「今日」になって出たような場合でも、選挙に「勝つ」という事象は「昨日」の中に位置づけられる。なお、「話し手」とされている楕円の領域は、話し手が発話する時(今)、その発話が行われる場所(ここ)を表しているものと判断されたい。また、以下では、表示を見やすくするために、「話し手」や「時の流れ」等の記載を省略する場合があることを了承されたい。

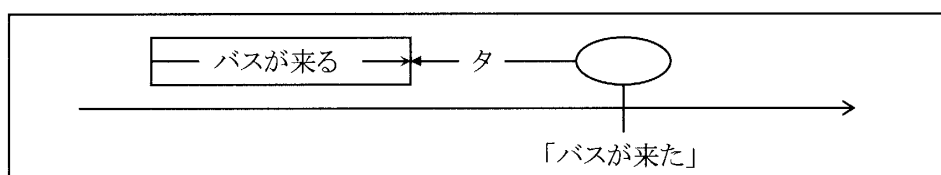
2. 過去を表さないタ?

2.1. 語彙的な問題

2.1.1. 「来た!」

続いて、タが過去を表していないとされる例を見る。

(02). 「バスが来た」



この表示では、「バスが来る」という事象が発話時から見て過去に位置づけられている。そのため、タが使用されていることに問題はない。

そこで、「バスが来た」と発話する時点でバスが話し手に向かって進んでいる場面を想定する。その場合、通常(02)の最後にエクスクラメーションマークが付けられるような強勢が置かれることが多いが、その状況においても、(02)を使用することができる。ところが、「来る」という事象が過去に位置づけられるのであれば、発話時において「来る」が成立していない、つまり、バスは止まっているはずだという疑いがもたれるかもしれない。そう考えた場合、タが過去を表していると説明することが困難になる。さらに、ここで設定した状況では、(03)のように言うこともできそうである。

(03). 「バスが来る」

つまり、ルを使用してもタを使用しても同じ内容が表されることになるため、なぜ、(02)であえてタが使用されたのかが問題となる。なお、ここで使用されているようなタは、「(過去の)期待の実現を

¹ タの意味を「過去」に還元する試みは井上(2001)等にも見られるが、タは完了を表す(安藤1986)こともある(工藤1995, 金水2000)という議論も根強いようである。後者の見解に従えば、以下で議論する「領域」に入る、あるいは、「領域」から出ることが「完了」した場合にタが使われると説明することも可能である。ところが、一過性の事象の場合に「完了」が「過去」といかに区別されるかが不明であり、状態や存在の「完了」が何を表すかははっきりしない。また、英語では同じ形式の完了であっても「継続」と「経験」の二つの解釈が可能な場合があり(柏野1999: 185)、どちらの意味で「完了」を使うかによって、事象の時間的な位置づけが異なることも問題となる。

表す」(寺村1984:341)等と説明されることがあるが、以下の例を見れば、期待とは関わりないことが明らかであろう。

(04). 「あいつが来た。今日は来ないって言ってたのに」

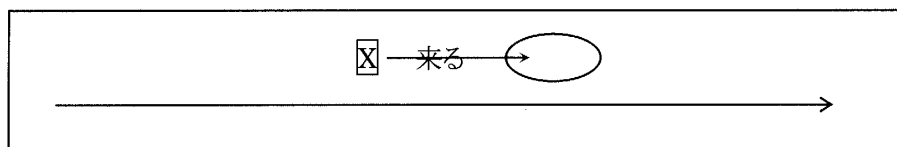
ホテルのパーティー会場にいる話し手が、遠くから嫌いな人物が近づいて来るのを見て、聞き手に小声で伝えている状況等を想定されたい。

さて、ここで(02)と(03)を比較してみると、まず、タを使用した(02)の場合には、(03)よりも事態が切迫している印象を受ける。例えば、話し手・聞き手にバスに乗る気がないのであれば、(03)のように「来る」が使用されそうであるのに対して、話し手・聞き手が乗ろうとしていれば、(02)のようにタが使用されそうである。そして、(02)の場合、話し手は、聞き手に対して、荷物を持ち上げたり、立ち上がったるように促しているものと考えられる。ここで想定される「乗るつもりがある」という背景が、「予測」や「期待」といった印象をもたらしているといえよう。しかし、話し手が「予測」や「期待」をしている場合、つまり、この場合にバスに乗るつもりでも、バスがまだ遠くであればタを使用しない(03)が発話される可能性が高いと思われる。そこで、差し迫った状況にあることがタの使用を促進していると仮定できる。ここで確認のために、10メートル先の角を曲がった車が、猛スピードで向かって来る状況を想定されたい。

(05). 「あっ、ポルシェが来た」

想定している状況では、車がすぐに通り過ぎるであろうが、(05)のようにタを使用すれば、聞き手に即座に反応させることができると考えられる。

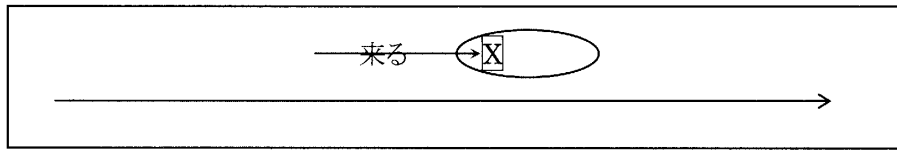
以上で見てきた「来る」と「来た」の差異を明示するために、主体となる対象と、その移動の方向を独立させて「来る」という事象を表示する。なお、ここではバスをXとする。



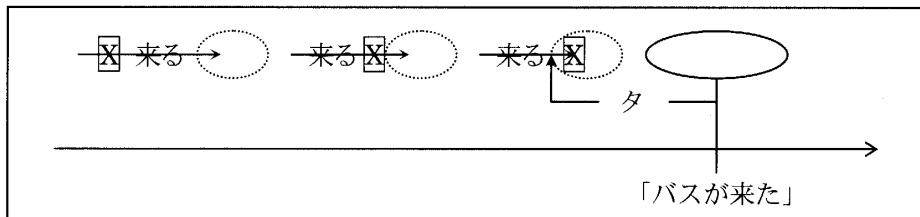
ここで、「来る」という動きの終点として想定されているのは楕円で表されている話し手の領域である。そして、表示されている状況では、バスが話し手の領域に向かってはいるものの、まだその領域内には入っていない。

想定している状況においては、近づいて来るバスを話し手が見ているため、(02)(03)のいずれの発話が行われる際にも、この表示に対応する「来る」という事象が成立しているといえる。しかし、(02)と(03)には相異があり、(03)が使用される場合には、話し手の領域への到着だけでなく、話し手の領域に向かって「来る」という事象自体も、未来において成立すればよい²。その一方で、(02)が使用される場合には、バスが話し手の領域内に入っている必要がある。

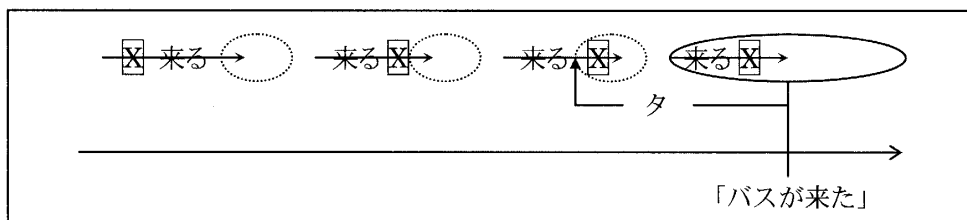
² 個別の語が持つアスペクトの問題と関わるが、通常、出来事や行為を表す動詞が現在形で使用されれば、習慣等を表すのでない限り、事象が成立するのは未来であると理解される。



(03) の場合には、発話時が時を表す矢印の左の方、(02) の場合には、矢印の右の方に位置づけられる。つまり (02) のタが表示する過去とは、バスが話し手の領域内に入った発話時以前の時ということになる。過去における話し手の「今」「ここ」を表す領域を点線で示せば、以下のように表すことができる。



想定されている状況も表示に組み込めば、話し手の領域内でバスが移動していることになるが、(02) では、バスの現在に関してなんら述べられていないため、そのような表示を行っても問題ない。



もちろん、(02) の発話時点で、バスが止まっていたり、話し手の領域から出ていたりしてもかまわない。

ここで、仮に、「来た」によって「来る」が成立していないことが理解されるとしても、それはタの意味から導き出されるのではなく、含意として認められるに過ぎないことを確認しておきたい。これは、(05) の場合にも同様であり、当該の車が話し手に向かって移動していても、急停車していても、あるいは、過ぎ去っていても問題ない。ただし、話し手に向かって移動していない場合には、(再び動き出したり、Uターンしたりすることが確実である場合を除いて)「来る」と言うことができない。

これまで明確に規定しなかった話し手の領域の範囲は、話し手の設定次第であり、満員電車の隣に「来る」といった狭い領域から、(火星人が)地球に「来る」といった広い領域までありうるが、「標準的」な日本語であれば、その領域の中心は話し手であると考えられる³。また、あえて言語化して「来る」ことを伝達する必要があるとすれば、その領域は、当該の対象が「来る」ことによって話し手・聞き手に何らかの影響がある範囲と考えるのが自然であろう。そして、タが使用されるのは、影

³ 例えば、「私がヨーロッパにいた時にビートルズが来た」と言う場合、「ビートルズ」が来た場所は日本という可能性があり、さらに、発話時に話し手が日本にいないこともありうる。その場合にも、話し手は自分が属する領域を日本と考えているだろう。

響が予測される領域内ですでに事象が発生した後であるため、何らかの対応をする必要があるだろう。その対応の必要性によって、状況が差し迫っているという印象が生まれると考えられる。なお、影響を受ける領域の設定は流動的であるため、同一の事象に対して、一見矛盾しそうな言明がいずれも真となりうる。例えば、(04) に続けて以下のような発話が成立しうる。

(06). 「いや、ホテルに來ただけで、やつは來ないよ」

(04) の発話者は、当該の会場を含むホテルの内部に影響を受ける可能性がある領域として設定している。しかし、ホテルを領域とすれば「來た」と言える場合であっても、それよりも狭い会場を領域とすれば「來た」とは言えないことがある。(06) における「來た」と「來ない」が両立するのは、それぞれ設定される領域が異なるからだといえる。

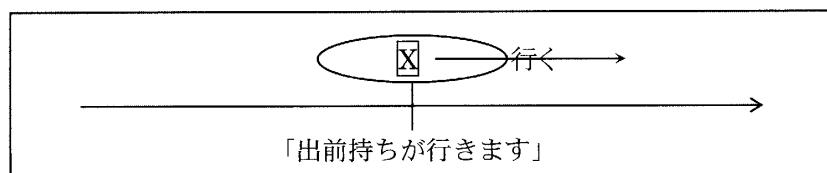
以上の議論から、「來る」の意味は話し手を中心となる領域に「向かう」ことであり、領域に入るのが発話時よりも未来であれば「來る」、発話時から見て過去であれば「來た」となると説明できる。「來る」の意味をこのように規定しておけば、(02) のタもまた過去を表しているといえる。

続いて以下の例を見る。

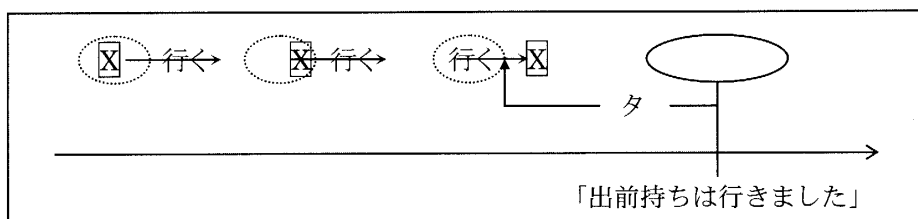
(07). 「さっき、行きました」

頼んだ出前がなかなか來ない時に、店に確認の電話をして、このように言われたことのある人も多いだろうが、(07) ではタが使用されているため、「行く」は過去の事象のはずである。しかし、出前が來ていないという文脈では、当然、出前は到着していないはずである。それにもかかわらず、(07) ではタが使用されているため、このタにも過去を表す以外の機能があると疑う余地がある。

ここで、発話場面を想像すれば、店員が (07) を発話した際には、その目の前から出前持ちがいなくなっているはずである。仮に、目の前にいれば、(正直者である限り) 「行きます」としか言えないからである。ここで、出前持ちを X で表す。



(07) の聞き手が「ウソ」を感じる人が多いのは、出前持ちがまだ店員の目が届く範囲（例えば、店内）にいると想像するからであろう。それに対して、出前持ちが話し手の目の前からいなくなれば、(07) は正しいと判断できる。



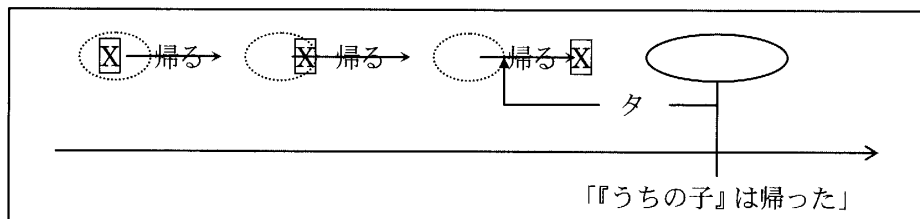
(07) の発話時において、出前持ちがまだ到着していなくても、(さらに、出前持ちが途中でサボっていても) それは「行ってない」のではなく「遅い」のである。そのため、出前持ちが文句を言われることがあっても、(店長であるとか、連帯責任を負わされるとかでない限り) 電話を受けた店員が責められる筋合いはない。また、注文した人物の家が見つからず出前持ちが戻ってきたとしても、(07) は「ウソ」とはいえないであろう。つまり、「行った」が事実であっても、「到着」したとは限らない。

以上で見てきたように、「行く」に関して、当の対象が話し手の(目の届く)範囲内であれば「行く」、その範囲外に出ていけば「行った」が使用されるというように、領域によってタの機能を説明することができる。

「帰る」という動詞の場合にも、領域設定が問題となる。

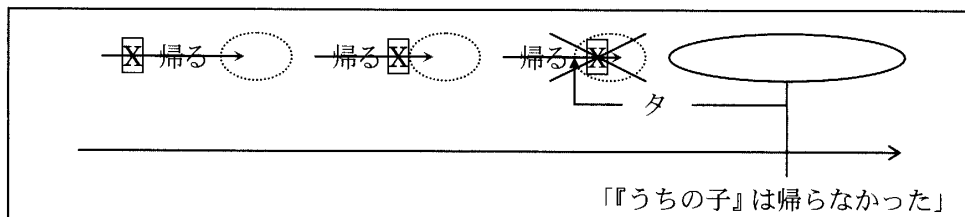
- (08). A: 「昨日、うちの子帰らなかったんだけど」
B: 「え、帰ったよ」

まず、Bの発話から検討するが、この話し手は、「帰る」時に移動する出発点にいる。そこで、「うちの子」をXで表せば、「帰る」が過去になるのは、その領域から出たときである。



つまり、この場合の「帰る」は「帰って『行く』」を意味している。それに対して、Aの発話者が「帰らなかった」と言うのは、Aの領域に入っていないからである。つまり、待っている側としては「帰って『来る』」の意味で「帰る」が使用され、「帰る」が過去になるのは、領域内に入った時である⁴。

(08) ではそれが成立しなかったから、「ない」という否定語が組み合わされている⁵。



⁴ 「帰る」という行為は「帰った」瞬間に終止する(安藤1986:193)とされているが、「帰った」瞬間は話し手の領域次第で変わることには注意する必要がある。

⁵ ここでは、「帰らない」が「過去」に成立したのではなく、「帰る」が成立した「過去」が「ない」ととらえている。このとらえ方は、おそらく、直感的に問題なく理解されるであろうが、線状的な文構造と対応していない。この問題に関しては、「来てよかった」および「食べなかった」を扱う時まで先送りして、ここでは、「帰った」の問題に焦点を当てて議論を進める。

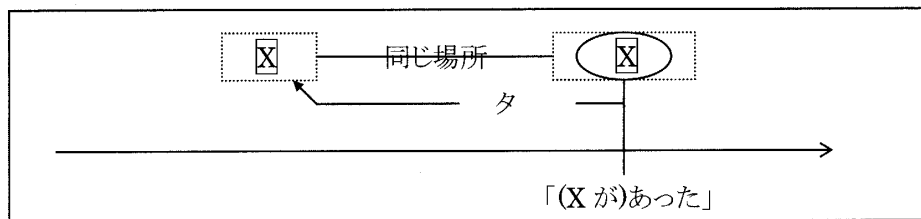
2.1.2. 「あった！」

(09). 「ここにあった」

これは、「発見のタ」として説明されることの多い例であり、「話し手の予期・期待が実現したことが表されている」(寺村1984:342)、「発見の『・・・タ』が用いられる場合は、前もって何らかの予測や期待があることが多い。観察行為がなされる背景には、何らかの予測や問題意識があることが多いからである」(井上2001:144)等と説明されている。

このような説明が必要とされるのは、発話時に当該の対象が「ここ」に存在しているにもかかわらず、タが使用されているからである。(09)のように、「あった」と言われれば、存在していたのが過去である(つまり今は(当該の場所に)存在していない)のではないかという疑いが生じ、また、仮に、「あった」と「ある」が同じ事象を表現するのであれば、両表現の差違は、表される事象以外に認める必要が生じるであろう⁶。そこで、タの使用とルの使用は、ムードの差異として説明されることになる。しかし、話し手の(推測される)心理のあり方に差異があることは認められるものの、タがムードを表すからそのような差違が生じるというより、タが過去を表すからこそ、そのような雰囲気(ムード)の差違が生じると考えたほうが、タの機能に関して統一的に説明できる。

ここで、「あった」とされるものをXとし、現在でもその対象が当該の位置にあるという発話状況を考慮に入れば以下のように表示できる。

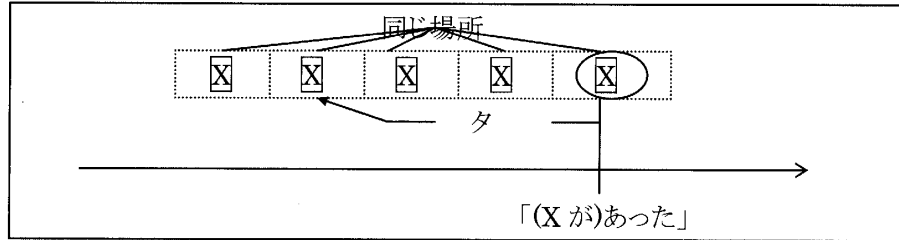


この表示では、点線の四角が問題となっている対象(X)のあった場所(ここ)を表している。

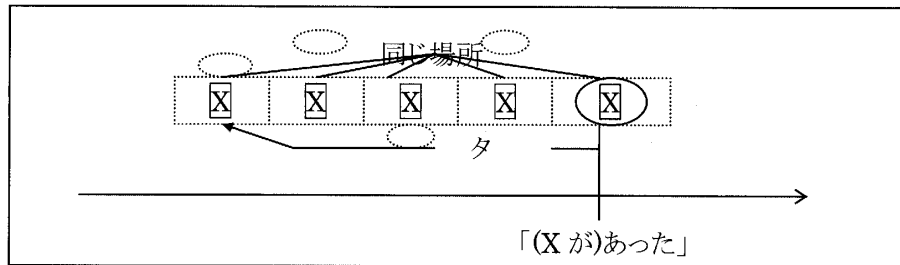
ところで、一過性の事象を表す動詞であれば、その事象が過去に位置づけられることによって、発話時以前における事象の終了が理解される。(01)の場合、「勝つ」が過去に位置づけられた時点で、勝負はついたことになる。つまり、(別の試合でない限り)発話時(以降)において「勝つ」は成立しない。しかし、対象の位置や存在を表す「ある」という動詞では、それによって表される事象が過去に位置づけられる場合にも、当該の対象の位置や存在が発話時まで保たれている可能性がある。その点で、「ある」は「行く」や「来る」と類似している。しかし、「行く」「来る」という行為が(惰性ということはあるかもしれないが)意図的に行われなければ継続しないのに対して、「ある」によって表される存在の場合、一旦過去において対象の位置が決まれば、慣性の法則によって(外部からの力が働かない限り)それ以降にも同じ位置にあると判断するほうが自然である。よって、(09)では、「あっ

⁶ 発見の「あった」は「見つけた」と同意であるからタが必要だという議論も不可能ではない(金水2000:65)。つまり、「ある」ことが「確認」されれば「見つけた」と言われる(その場合、「見つける」とは言えない)ように「あった」になるというわけである。この議論は、「ある」と「あった」の語彙的な同一性や、「ある」「見つける」といった個別動詞のアスペクトを無視しているが、タが「確認」時点としての過去を表すという一般化がどこまで通用するかは興味ある問題である。

た」とされる過去の時点だけでなく、その時点と発話時との間にある時間、さらに発話時にも、当該の対象が同じ位置にあると理解されよう。



なお、仮に、話し手が発話時以前に「ここ」に来ていたら当該の対象は見つけることができたと考えられる。そのため、話し手はそれ以前に「ここ」にいなかったと判断できる。

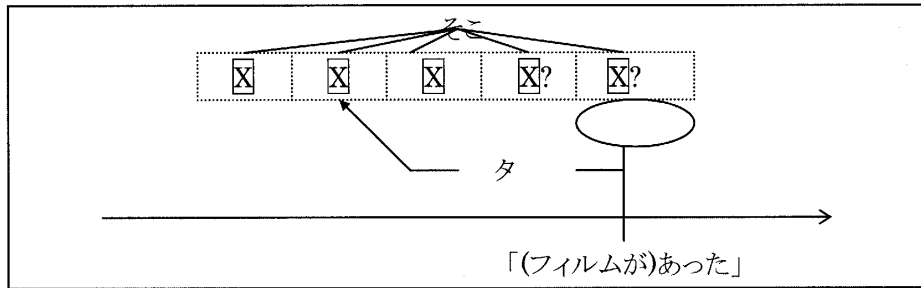


(09)におけるタも過去を表しているのだが、「ある」という動詞の性質から、過去から現在まで続く同一の状態が理解される。そこで、「ある」が使用される場合には、現在の状況そのものが見られており、それに対して、同じ状況であえて「あった」が使用される場合には、現在の状況を通して、過去に「あった」という状況が見られていると考えることができよう。そして、そのような過去の事象を見ようとするのは、過去において当該の対象の存在（位置）が問題となっていたからであり、そのため、(09)では「発見」という印象が生まれるのであろう⁷。

以上で見てきたように、過去における状態が述べられているからといって、現在においてその状態が変わっているとは限らない。場合によっては、過去の状態が発話の現在において継続していることが示唆される。発話者Aがファイルを探している状況を想定されたい。

- (10). A: 「ファイル知らない？」
B: 「そこにあったよ」

⁷ 「探していた」「知らなかった」という過去の事象に目が向けられているから、それと同時に成立していた事象を表す際に、タが使用されるという考え方も不可能ではない。しかし、その考えの裏づけには、複文を検討する必要があるため、本論では議論できない。



(10) の B の発話によって、A は当該のファイル (X) が今も「そこ」にあると推測するであろう。そして、おそらく、A は「そこ」として指示される場所を探すと考えられる。ただし、「そこ」にファイルがないからといって、B が責められることはない。B が述べているのは過去の状態であり、現在に関する情報は推測に過ぎないからである。むしろ、現在ファイルが置かれている位置に関して B が確信をもてないからこそ、タを使用したともいえよう。

なお、B が A の質問に対する答えにおいて「ここ」を使用すれば、二種類の解釈が可能である。一つは、単に、過去における対象の位置づけが述べられているという解釈で、例えば、かつて B の領域内にあったファイルが今は (角度等の理由によって) 見えない場合に、そう理解するのが自然であろう。もちろん、その場合、ファイルが現在「ここ」に存在しないかもしれない。それに対して、今も (見える状態で) 「ここ」に存在しているのであれば、過去の時点からその場にあったのだから、「見つけて当然だったのに」(あるいは「早く訊けばよかったのに」) という含みを感じられる解釈になる⁸。「ここにあるよ」が十分な答えである場合に、あえて、「ここにあった」と言われることによって、過去に目を向けさせられるからである。「あった」から導き出される「発見」や「想起」(工藤1995)、さらには「後悔」等の含意はこのように発話状況に依存しており、タの意味から直接生じているわけではないといえよう。

2.1.3. 「取れてた！」

以下の例では、発話する以前から同じ状態が続いていた (がそれに気づいていなかった) ことが述べられていると理解することが可能である。

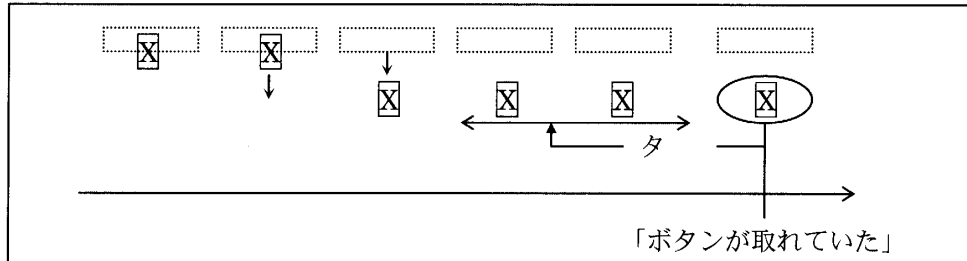
(11). 「あっ、ボタンが取れてた」

(11) で使用されている動詞「取れる」が表す事象は、付いている状態から、取れている状態に移る一過性の出来事であるため、それに後続するテイルが「進行」の意味を表していると解釈するのは困難である。そのため、いわゆる「完了」の解釈となり、すでに成立した「取れる」の結果である「取れている」状態の継続が理解される。さらに、(11) ではテイタと過去形になっているため、「取れている」状態は、タが表す過去の時点より前から続いていたと理解できよう。

さて、常識的な理解によれば、一旦取れてしまったボタンは、誰かが付けるまで取れているはずである。そのため、話し手が取れたボタン (あるいはボタンが取れたシャツ) を以前に見たという文脈

⁸ 「正解は、3番でした」(井上2001: 150) や、「やっぱり彼が犯人だった」(寺村1984: 342) に関しても、現在確認される情報である「正解」や「犯人」はあらかじめ確定しており、以前に知ることができたはずだという認識からタが使用されていると思われる (井上2001: 150)。

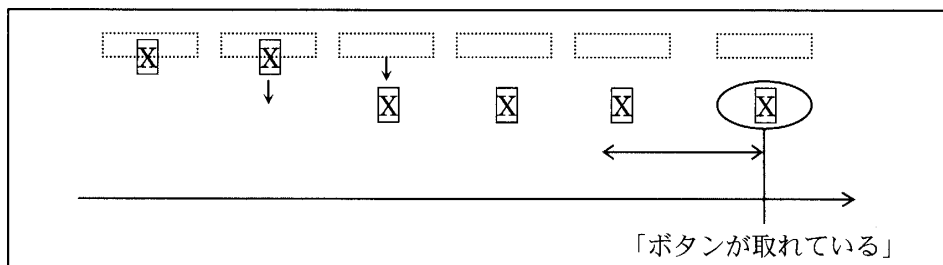
では、発話の時点でボタンが付いていれば、「(取れていたのに) 付いてる」等の発話が生じると考えられる。よって、(11) では、タが使用されていても、発話の時点でボタンが取れていると考えたほうが自然であろう。そこで、ボタンをX、ボタンがもともとついていたシャツを長方形の点線、さらに、ボタンが移動する方向を矢印で示せば以下のようなになる。



ここで (11) は話し手が取れたボタンを見つけた直後の発話であると仮定して、ボタンを話し手の領域内におき、シャツを領域外に置いたが、ボタンが取れているシャツが手元にあるかもしれないし、どちらも手元にあるかもしれない。

ここで検討した文脈では、発話の時点でもボタンが「取れている」わけだから、「取れている」と言うことも考えられる。

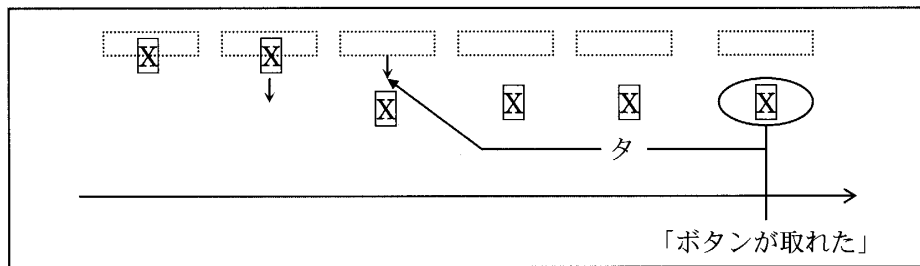
(12). 「ボタンが取れてる」



この場合にも、テイルが使用されているため、取れた状態が以前から続いていたと理解できるが、継続を振り返る基点は現在である。そのため、過去を表すタが使用されている場合と比べて、継続のスペンが短いと感じられる。つまり、(11) と比較して、過去において気づくことができたかもしれないという思いが弱いと感じられる。

以下の例では、テイルが使用されておらず、一過性の「取れる」という事象が過去に位置づけられるに過ぎない。

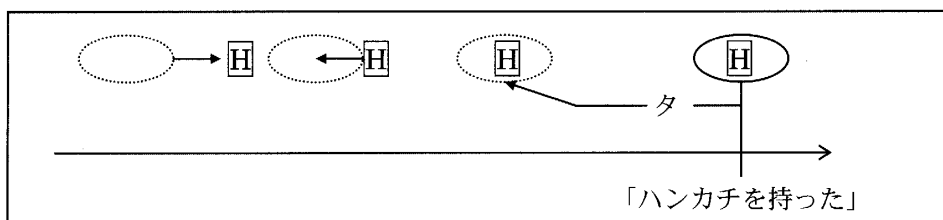
(13). 「どこで取れたのかなあ」



(13) でも、過去において取れたボタンは、発話の時点でも取れていると考えられるが、発話時においてボタンが付けられていてもかまわない。(11) でもタが含まれているため、文脈次第では発話時にボタンが付いていることがありうる。しかし、タを含まない(12)では、ボタンが発話の現在において付いていないはずである。

以上で見てきたように、タが使用されていても、当該の文で表される過去の状態が現在まで続いていることがありうる。これは、事象が過去に位置づけられることによって、その逆の事象が現在成立していることが帰結するわけではないからである。タによって表される過去の事象に関して、その結果が発話の現在まで続いていると理解されることは珍しくない。

- (14). A: 「ハンカチ持った？」
B: 「うん持った」



この表示では、「持つ」に関わる対象の動きが矢印で示され、話し手がハンカチ(H)に向かい、それを引き寄せて、自らの領域内に入れるという事象が時間の流れに従って生じたことが表されていると理解されたいが、(14)では、発話の現在においてBがハンカチを持っているかAの話し手が聞いており、答えているBの方も、持った結果として、今も持っていることを述べようとしている。つまり、問題となっているのは過去に「持った」ということの結果である。

なお、「疲れた」「腹が減った」等も、現在「疲れている」「腹が減っている」場合に使用されるため、タが過去を表していないという議論がある。ところが、「疲れる」「腹が減る」では、現在「疲れている」「腹が減っている」ことを表すことができない⁹。そこで、「疲れている」「腹が減っている」のようにテイルを用いて現在における状態の継続を表すことも可能だが、疲労や空腹感を訴える時に、過去から現在にわたる時間的なスパンを眺める客観性はそぐわないと思われる。さて、現在「疲れて

⁹ 「ああ腹が減った」「ああ驚いた」「がっかりした」等、ある感覚、心理状態が生じた場合には、英語では現在形が使用されると指摘されている(安藤1986:192)。(なお、「疲れる」「腹が減る」という現在形は習慣や発話時以降の事象を表すため、現在「疲れている」「腹が減っている」場合に使用できないことには注意が向けられていないようである)しかし、そこで対応付けられているのはbe動詞と形容詞であり、英語の表現自体は時間的に過去から続く状態を表していると理解できる。逆に、英語と対応付けられる日本語が「腹が減っている」「驚いている」「がっかりしている」等であると考えれば、英語での表現は客観的といえるかもしれない。

いる」「腹が減っている」のであれば、それ以前に「疲れる」「腹が減る」が生じたはずであり、それを解消するための睡眠、あるいは、食事等がなされない限り、その結果となる状態が継続していると考えるのが自然である。また単に過去において疲労や空腹を感じていた（今はちがう）と伝達するのに、「疲れた」「腹が減った」と言うことはまずないであろう。そのため、「疲れた」「腹が減った」と聞けば、通常、その結果である「疲れている」「腹が減っている」状態が理解されよう。そして、切羽詰った状況では、むしろ「疲れた」「腹が減った」といったほうが自然と思われる¹⁰。また、過去の事象として客観的に述べるのであれば、「疲れていた」「腹が減っていた」と、過去を表すタだけでなくテイルを用いるのが自然であるが、それは、「疲れた」「腹が減った」という事態に移行した時点から、解消されるまでの間に時間的なスパンが想定されるからであろう。なお、「疲れていた」「腹が減っていた」では発話時に事態が変わっていると理解されることから、「疲れた」「腹が減った」が使用される場合には、現在その結果となる状態が継続していると理解されよう。

ここで、テイタの使用によって、過去の状態の変化が理解されることを確認しておく。

(15). 「ずっとここで待っていたのよ」

(15)が、待ち合わせに遅れてやってきた人に対するせりふとすれば、話し手はその発話時にもう待っていないはずである。「ここ」で相手に話しかけているとすれば、この話し手はその人と会ったことになるからである。そこで、この例から、「ここ」をなくせば、話し手、聞き手の位置が異なると理解できるが、(16)でもやはり、過去の状態が変化していると思われる。

(16). 「ずっと待っていたのよ」

(16)の話し手がすでに待ち合わせ場所から離れており、それでも待ち合わせの時間前後には、ちゃんと待っていたことを告げているという状況であれば、「待っている」という事象は過去のものである。また、(16)が、仮に待ち合わせの場所に電話がかかってきた時の対応だとすると、その対応をしている時点では、(一旦)待つことを止めていると判断してよいであろう。もちろん、(15)に与えた文脈と同じ状況であれば、当然、話し手は待っていない。さらに、待たれている人物が第三者であっても、状態が変化したと理解するのが自然と思われる。

(17). 「ずっと彼女を待っていたんだ」

(17)の話し手は、おそらく「彼女」を待つことを止めていた、あるいは、この発話と同時に待つことを止めるであろうと思われる。結局、「待っていた」で現在「待っている」状態が続いていると理解されやすいのは、待つ人物が第三者の場合だけであろう。

(18). 「彼が待っていたよ」

¹⁰「来た」を検討した場合と同様に、言及に値する状態に入ってしまったから、次の行動を起こさなければならないという切迫感が感じられよう。

(18) は、聞き手に対して「彼が待っている」ことを推測するように促すであろう。しかし、「彼が待っている」と言わないのは、現在待っているか否かが定かでないからだと考えられる。つまり、状態が続いていることは、話し手が責任を持って主張している内容ではないため、事象の継続が理解される度合いは低いだろう。

以上で「待っていた」を例として見たように、テイタが使用されれば、常に、発話時における事象の継続が理解されるとは限らない。むしろ、「待っていた」では、発話の現在において過去に成立していた事象が終了していることが示唆されると考えられる。それに対して、「取れていた」の場合には、事象の継続を推論するのが自然である。その差異は、「待っている」が「来る」「行く」等と同様に、意図的に行動しない限りその事象が成立せず、また継続させることもできないという点にあるといえよう。なお、「取れていた」と「待っていた」を比較すると、完了のテイルの場合には、タの使用によって当該の状態が現在まで継続していることが推論されやすく、進行のテイルの場合には、タの使用によって現在状況が異なることが推論されやすいと考えられそうである。しかし、(18) に関しては、(それを伝えることに意味があるとしたら) おそらく今でも彼が彼女を「待っている」から発話されるのであり、すでに待っていないことを知っていれば、(話し手が意地悪でなければ) もう「待っていない」と伝えるであろう。つまり、話し手の側も、(強く主張しないものの) 現在までの事象の継続を推測していると考えられる。逆に、「取れていた」に関しても、ボタンかシャツ、あるいは両方を見ている限り、単に過去のことが述べられている可能性もあり、ボタンが付いたシャツを見て「取れていたのに」等ということもあろう。よって、(解釈の傾向はあるものの) 完了・進行によって現在の状態に関する推論が定まるわけではない。ただし、語彙によっては、推論が定まることもある。例えば、「思い違いをしていた」、「忘れていた」(安藤1986:180) に関しては、主語が話し手である限り発話の時点で思い直している、あるいは、思い出していることになる。つまり、過去において思い違えていた、あるいは、忘れていた状態は、現在は成立していないことになる。

2.2. 文法的な問題

2.2.1. 「来てよかった！」

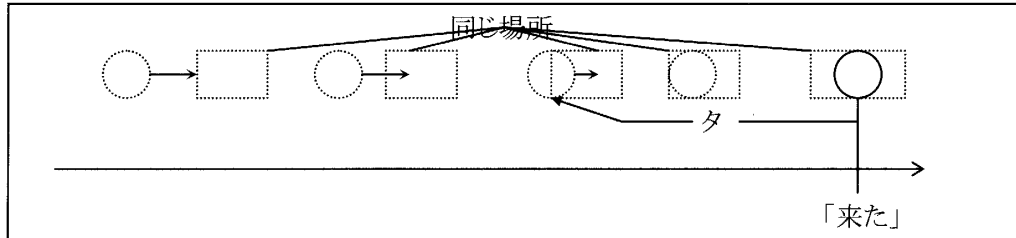
(19). 「来てよかった」

(19) では、「来て」という表現が使用されており、この形では「来る」が位置づけられる時間が明示されていない。しかし、(19) において、「来る」という事象が成立したのは過去であると理解される。これは、後続する「よい」にタが付与されているからである。つまり、「東京に行って、買い物をした」等と同様に、後続する文のタに依存して、過去であることが理解されると考えることができよう。それに対応付ければ、(19) は「来て、よかった」と分析され、「よかった」のタが、先行する動詞が表す事象を含めて過去に位置づける役割を担っていることになる。

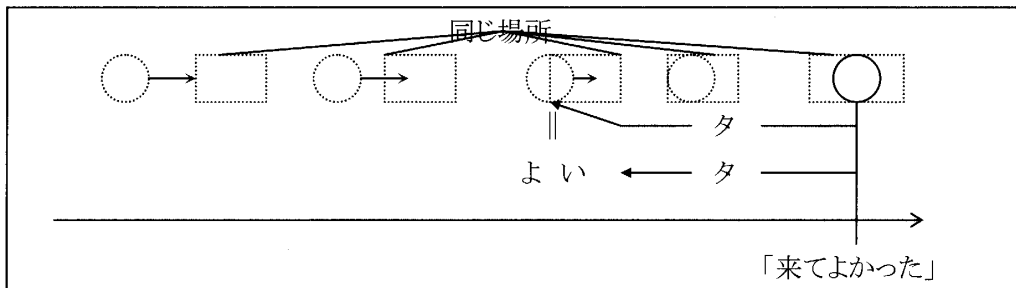
この例でまず問題となるのは、(19) が発話される際に、話し手が当該の場所にいるにもかかわらずタが使用されているということであろう。特に、(19) の場合には、話し手、聞き手のいずれもが(手紙や電話でなければ)「来る」の到着点となる話し手の領域内にいるはずである¹¹。しかし、これまで見てきたとおり、「来た」が事実であるとしても、現在その場にはいないことは帰結しないため、話し手

¹¹ なお、主語が第三者であれば、「もう帰ったけど、X君が来てよかった」等が可能である。

が「ここ」にいても問題にはならない。図が煩雑にならないよう、「来る」という記述を省略して表示すれば、以下のようになる。



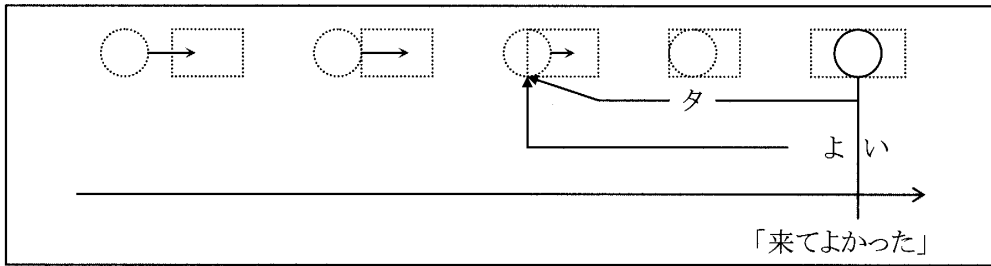
(19) では、その「来た」という事象について「よかった」と述べられており、「よい」についてもタによって過去であることが表されていると考えれば、以下のように表示できる。



さて、話し手が現在もその場所にいるのであれば、おそらく、その時点でも「よい」と考えられ、実際、話し手が「よい」と感じている場合にも、(19) のような表現が使用されることがある。そこで、現在も「よい」のに「よかった」とタを使用するのは、おかしいという指摘も可能であろう。ところが、「来てよい」とすれば、未来の話（しかも相手に対する許可）になってしまう。そのため、この場合には「よい」を使用することができない。そして、過去において到着したという事象と、現在、話し手が「よい」と感じている事象のそれぞれを時間的に対応付けて表現すれば、「来たのがよい」等となるだろうが、このような表現は通常耳にしない。

そこで、「よかった」に関しては、これまでと異なるとらえ方を検討する。まず、「よい」という語自体について考えてみるが、この表現は、ある事物に関する話し手の「評価・判断」を表している。つまり、(19) では、「来た」ことに関して肯定的な評価が行われているわけだが、その判断は、発話の現在において下されていると考えられる。例えば、「あのころはよかった」という表現は、「あのころはよくないと思っていたけど、今思えばよい」という場合に使用されることがあっても、「あのころはよいと思っていたけど、今思えばよくない」という場合には使用されない。後者の場合には、「あのころはよくなかった」と言うのが自然である¹²。このような理解に対応付ければ、(19) は、以下のように表示される。

¹² 明らかに評価を表す表現でなくても形容詞であれば同様な理解が見られる。「月は大きいと思っていたけど、確認したら地球より小さい」という場合には、「月は大きかった」ではなく「月は小さかった」と言われるであろう。



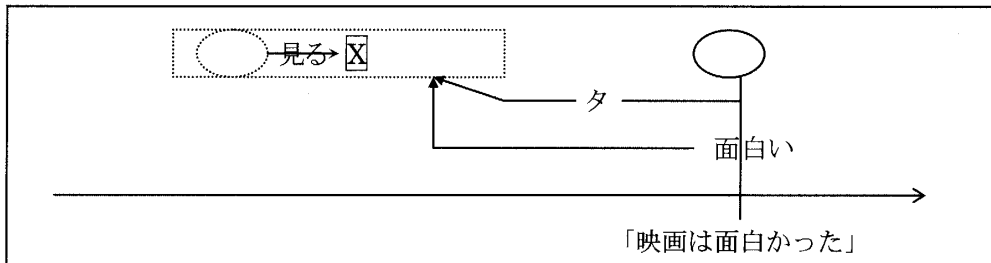
そして、このような状況で「来てよかった」が使用されるのだとすれば、表層的には「よい」にかかっているタが、内容的には「来る」に関する過去を表していることになる。

以上の考察を逆にいえば、日本語の文法で評価される対象・事象が過去に位置づけられる際には、評価を表す表現にタが加えられると説明できる。そのような扱いに関して統語論的な検討が不十分であるという指摘を覚悟していえば、事実として「X(過去)がよい」という場合には、「Xがよかった」のように表現されるというわけである。寺村は、「英語などでは、しばしば、その話し手の判断を表す部分と、客観界のコトを示す部分とが分離してそれぞれの役割が明確になっているのに、日本語ではこの二つのものが癒着して一体になっている」(寺村1984:327)としているが、それを参考にして、外国語を議論に持ち込めば、「来てよかった」が“*I'm glad I came*”(寺村1984:327)に対応するという現実が、上記の説明を支持すると考えられる。また、日本語の[[[[[ヴォイス]アスペクト]肯否]テンス]モダリティ]という埋め込み構造を考えれば、評価が「肯否」に関わるものとしてテンスの前に位置づけられるという制約に依存していると考えられることも可能であろう¹³。さらに、「来た」という事象の一過性と、「よい」が表す判断の恒常性とのギャップを埋めるために、「よい」にもタが加えられた(そして、先行するタは省略された)と考えることもできよう。

その理解に基づけば、以下の例も容易に扱うことができる。

(20). 「あの映画は面白かった」

この例が問題になるのは、話し手が現在でも当該の映画が面白いと思っている場合である。しかし、ここでタが付与されているのは、述定が過去の時点に位置づけられるからでなく、指示対象(となる事象)が過去に位置づけられるからだと考えればよい。ここでは、映画をXとして表示する。

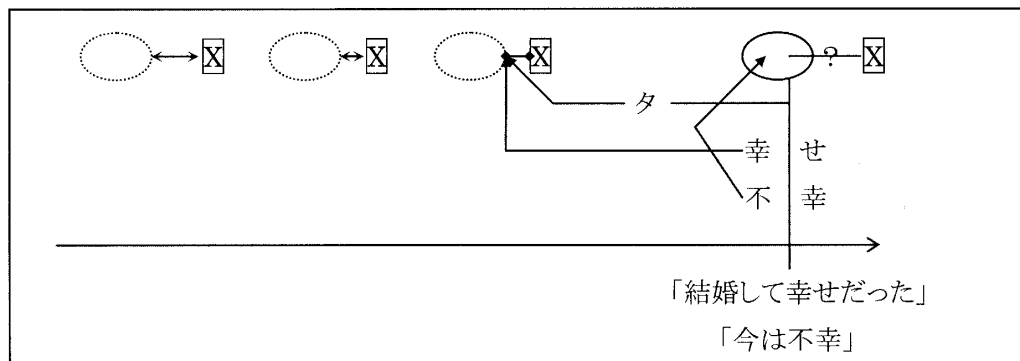


¹³ ちなみに、以下のような対応付けになる。

[[[[[ヴォイス]アスペクト] 肯否] テンス] モダリティ]
 まだ店は+開け+ られ + てい + なかつ + た + らしい
 来 + て + よかつ + た

タが表す過去の位置づけを明示的に表現すれば、(20)は「映画はどうだったかというと、『面白い』」といったものになろう。この場合、実際に映画を見た時にどう評価したかは問題とならないが、仮にこの映画のフィルムが一本しかなく、それが焼失してしまった場合に「面白い」とは言えない¹⁴。現在存在していない対象は過去にしか位置づけられないため、評価を表す述定部分に過去を表すタを加える必要があるからである。これは、ある料理に関して、食後に「うまい」とは言えないのと同様である。しかし、現在フィルムが存在していても「面白かった」と言って問題ないのに対して、料理が残っている場合に「うまかった」と言うのは不自然である。これは、通常、食事が終わってはじめて料理の味に関する評価が行われるからである¹⁵。その点では、映画について「面白かった」と述べられるのが、通常、最後まで見てからであることと同じである。もちろん、特定の場面を話題とすれば、映画が終わる前にも「面白かった」と言うことができるように、料理のある部分のみを食べてそれを判断するのであれば、食事の途中で「うまかった」と言うことも可能である。ただし、一口食べて即座に「うまかった」と言えば、評価すべき食事が終わったとみなされ、皮肉として理解される恐れがある。ここで、指示対象（となる事象）の時間的な位置づけに依存したタを確認しておく。

(21). 「結婚して幸せだったけど、今は不幸」

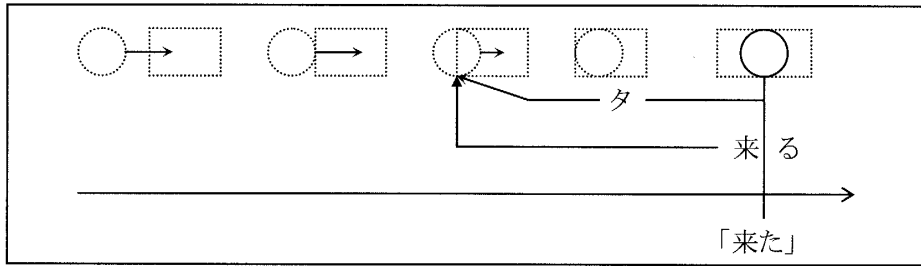


表示では、結婚した相手を X とし、結婚している状態を「◆◆」で表したが、発話の時点における X と話し手との関係に与えた「？」が示しているとおり、(21) では、話し手が（不幸である）現在において X と結婚していても、していなくても問題とはならない。

なお、このような解釈表示は動詞の場合にも可能である。

¹⁴ なお、「驚いた」等が発話される時には、その時点で話し手が「驚く」という心理状態にはない。驚いている時点では、通常、声が出ないか、呻き声・叫び声が出るかであって、当該の心理状態が「驚き」であったと認識されるのは、その後のことである。そのような心理状態を確認した時点で、驚かせた対象（事象）は、過去の対象とみなすことができよう。「怖かった」に関しては、「怖い」と感じている心理状態が続くことがあるだろうが、やはり、「怖かった」と言う時点で、当該の対象（事象）が消滅していたり、そこから逃げていたり、慣れてしまっていたりすると考えられる。

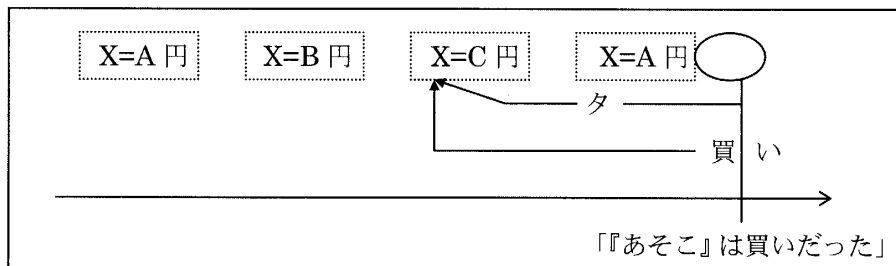
¹⁵ ここで問題としているのは「評価」される対象としての食事であり、「食べる」に関していえば、一口であっても「食べる」が過去に位置づけられた時点で「食べた」と言える。



この表示は、「私がしたのは、『来る』だ」といった（メタ言語的な）強調構文に対応する。例えば、「私は（行ったのではなく）来たのだ」といった文であれば、このような表示が相応しいであろう。

以下の例は、「過去に実際しなかったことを、すべきであったと主張・回想する」（寺村1984:337）ものであり、過ぎ去った事象に関する「話し手の価値、当為判断」（寺村1984:337）をタが表しているとされているが、その「回想」という印象は、判断の時点と指示対象となる事象が位置づけられる時点とのギャップから生じていると考えられる。

(22). 「あそこは買いだった」



ここでは、「買い」と評価される対象が株であると考え、問題となっている株を X、過去の特定の時点における価格をイコールで結ばれるアルファベットで表示した。

この表示からわかるように、(22) でタが使われているのは、特定の価格の株が過去に位置づけられるからだと考えられる¹⁶。つまり、(22) は「ある状態にあった株は『買い』」という判断を表しているわけだが、ここで「買い」と判断されるのは、発話時点の株価が以前より上がっているからである。しかし、株に関する高値・安値は相対的なものであり、また相場の動きは（インサイダーでなければ）あらかじめわかっているわけではない。ある株が「買い」という判断の正しさは、値動きを見てはじめて確信を持つことができるのであり、確信を持った時点ではもはや「買い」ではなくなってしまう。そのため、(22) の話し手は、買わなかったことを後悔している（あるいは買ったことを喜んでいる¹⁷）という印象が生まれる。ただし、ここで後悔（あるいは、歓喜）が感じられるの

¹⁶ 以下の例に関して、井上では、過去において「観察行為—状態の判明」というプロセスがあったため「第9だった」とタが使用されたと説明されているが（井上2001:139）、手元にある対象ではなく、もらった過去の時点での対象として指示するためにタが使用されたと考えられる。

「今日太郎から CD をもらった。ベートーベンの第9だった」（井上2001:138）

なお、井上では「確認」のために「見たら」という文脈が与えられているが、本論の見方では、先行文の「もらった」からダイレクトにタの使用が説明できる。

¹⁷ イントネーション次第だが、(22) から常に「過去においてしなかった」、あるいは「後悔している」ことが帰結するわけではない。

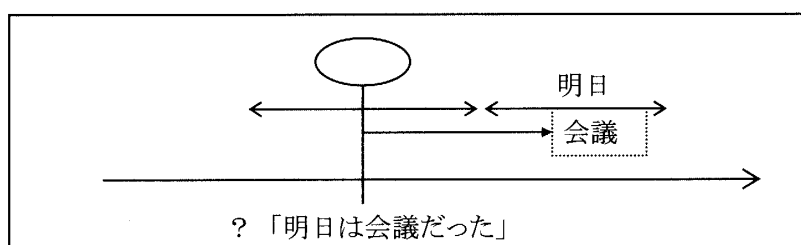
は、相場（あるいは、株を買う資金）が変動するものであるからに他ならない。例えば、複数の不動産業者を回って、最初の業者のマンションがベストであると判断した場合にも(22)を使用することができるであろうが、その場合には（価格が急騰したり、売れてしまったり、あるいは、その業者の店舗に行くのが大変だったりしない限りは）後悔の念が理解されることはないだろう。

2.2.2. 「明日は会議だった！」

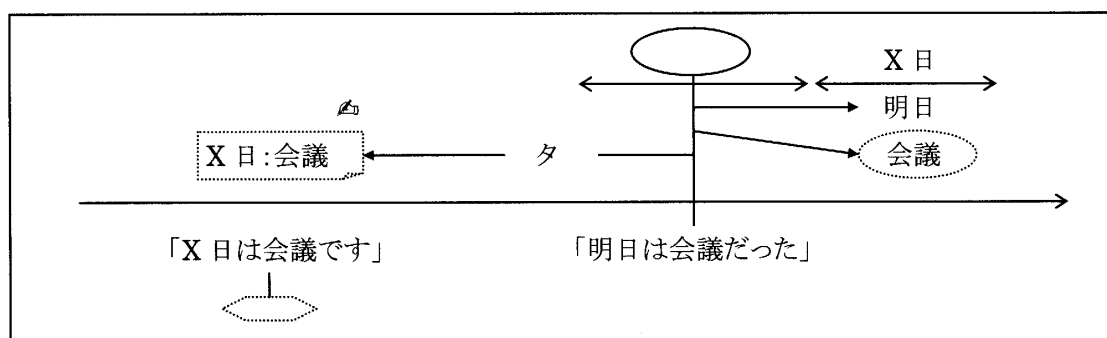
続いて、「忘れていた過去の認識を思い出す」（寺村1984:338）とされる類に含まれる例を見る。

(23). 「あ、明日は会議だった」

ここで、「明日は会議」という事象を表示すれば以下のようなになるが、この表示では、発話内容と発話時点との間に時間的な前後関係がないため、タを使用する動機が見当たらない。

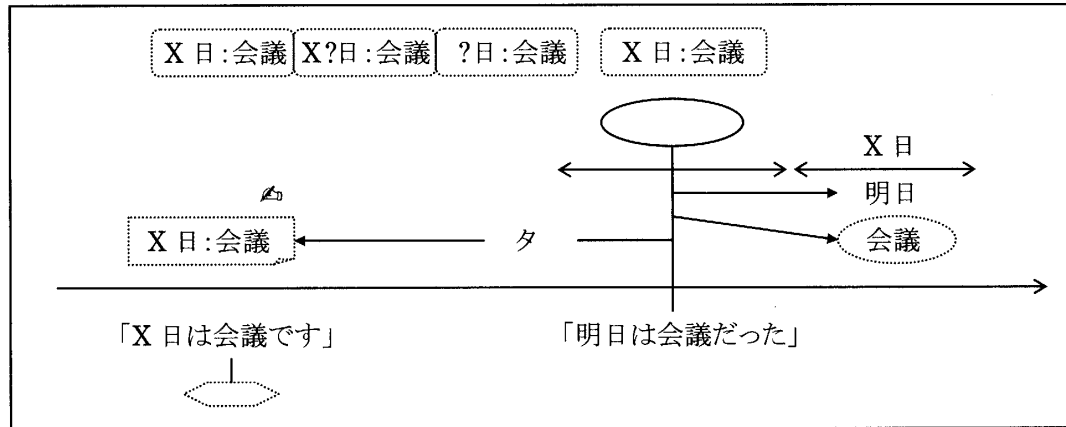


これまでの研究における類似した例に関する指摘を見ると、このようなタには「『過去において決定した』という意識」, 「『過去に教えてもらった』という意識」(今井1995:18)があるとされている。そこで、(23)の発話時に、話し手がカレンダーのメモを見て会議を思い出したという文脈を考える。その場合、現在カレンダーには「X日：会議」といったメモが書かれていることになるが、「X日：会議」と知らされ、それをカレンダーにメモしたのは発話以前、つまり、「過去」と考えることができる。



この表示の左側は、話し手以外の誰か（その領域は点線の六角形）が「X日は会議です」と述べて、そのときに話し手がメモした(ぬ)ことを表していると理解されたい。もちろん、単にふと会議の開催日時を思い出した、あるいは、誰かに確認されたといった文脈であってもよいが、タが使用される場合には、記憶された情報とともに、過去においてその情報が記憶にとどめられた状況を想起していると考えられる。何かを思い出そうとする場合に、記憶した場面を手がかりとすることは日常的にみ

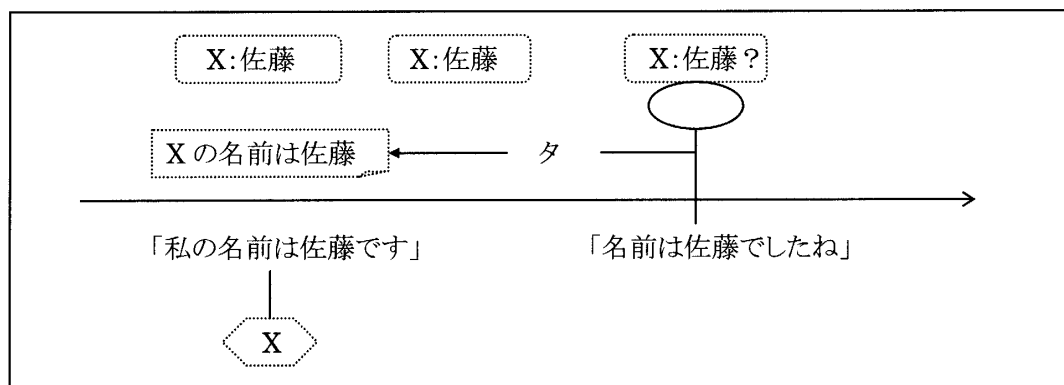
られるストラテジーといえよう。そこで、角の取れた四角の領域を話し手の記憶領域とすれば、以下のように記憶が薄れていくことを表示に加えることができる。



もちろん、発話時から見て「明日」である日に、何か特別なことがあることは記憶に残っているが、それが会議であることを忘れていた場合にも (23) が使用されるであろうが、その表示は割愛する。

以下の例も同様に、以前に聞き手の名前を聞いたことがあるからこそ、確認が行われていると考えられる。

(24). 「名前は、佐藤でしたね？」



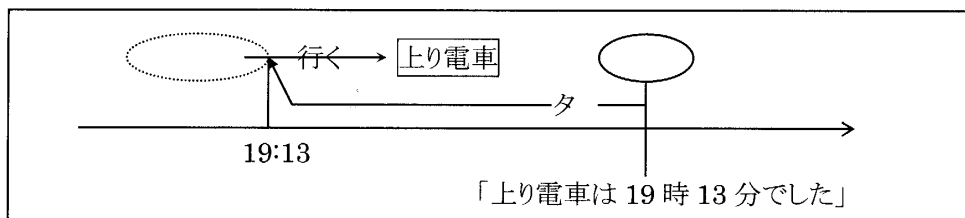
これまで見てきたように、過去において与えられた情報を検索する際にタが使用される場合があるが¹⁸、ここで、情報が与えられているのが誰であるかに関して検討しておく。

疑問文は通常、相手が持っている情報を得るために使用される。そのため、タが使用されている場合には、尋ねる相手に過去の情報を検索させようとしていると考えられることもできそうである。安藤の、聞き手にとって「先刻承知という含みをこめて、聞き手にその確認を求めるのに用いられる」という指摘も、その点に関わっているといえよう (安藤1986:194)。そこで、以下の例を見る。

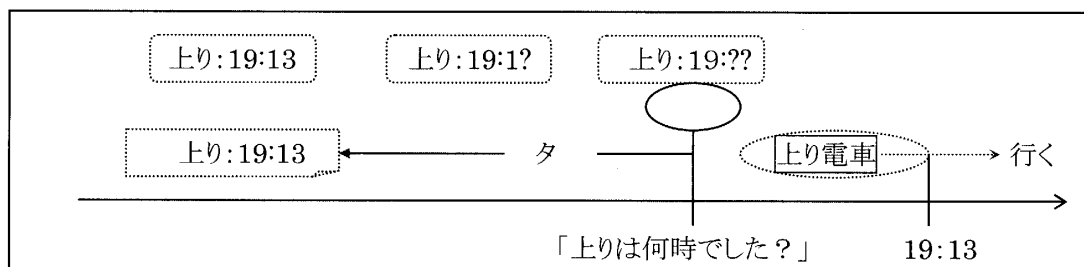
¹⁸ (23) (24) に関しては、英語でも同様に過去形が使用されることがあると指摘されている。「会合は明日でしたか?」「Was it tomorrow that we were to meet?」「次の会議はいつだった? 今度の金曜だったっけ?」「When was our next conference? Was it this coming Friday, or what?」「君、苗字はなんていったっけ?」「What was your last name again?」(今井1995:18)。安藤はさらに、「明日は約束があった」は「I've forgotten I had an engagement tomorrow.」と対応

(25). 「上り電車は何分でしたか？」

ここで、聞き手である駅員の答えが「19時13分でした」であったとする。その答えを出す際に、駅員が自分のもつ「過去」の情報を検索したとすれば、おそらく、発話時間は19時13分よりも後である。



つまり、(25) を聞いた駅員は、話し手が乗り遅れた電車の時刻を訊いたと理解しているであろう。しかし、(25) の例は、タが過去を表さないものとして検討されており、話し手が、これから発車する電車の時刻を訊いている場合が問題となっている。実際、話し手が「先刻」から定められている時刻を忘れていたことも考えられ、そのように理解することも不可能ではないだろう。



しかし、駅員が適切な答えを出すためには、「時間を尋ねた人物」にとって「承知」であったはずの時刻が求められていると理解する必要がある。つまり、(25) のタは、聞き手ではなく、話し手が過去の情報を検索したから現れたと理解する必要がある。なお、駅員にとってもその時刻は「先刻承知」であるため、「19時13分でした」と言うことができるはずだが、検討している解釈の場合には、「19時13分です」と答えるのが普通である。駅員は、自分にとって常にアクセス可能な（はずの）情報を想起するために、わざわざ情報を手に入れた時点を検索しないからである。

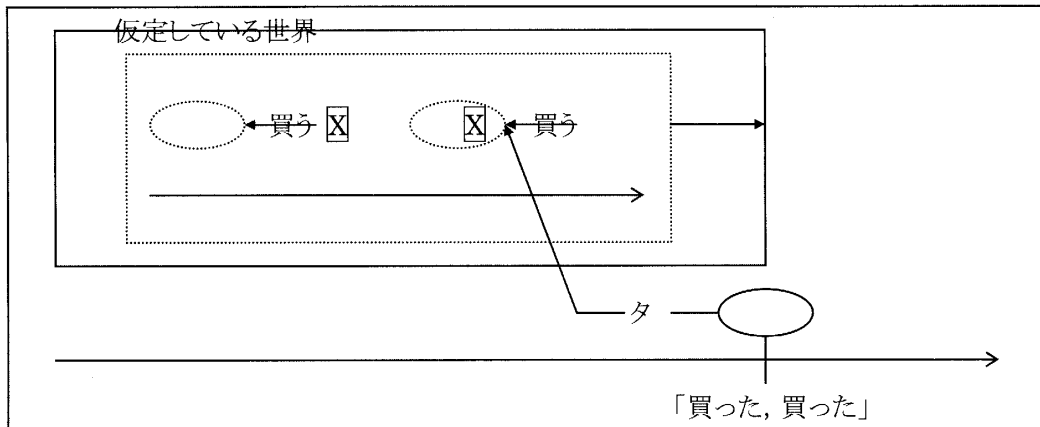
づけられ（安藤1986:193）、「何だ、そこにいたの？」は「I didn't know you were here.」と「類似点を持っている」と指摘している（安藤1986:192）。つまり、「忘れていた」ということが、このタを生じさせているということになるだろうが、この英文では時制の一致により過去形が使用されているのであって、対応する日本語であれば「明日約束があるのを忘れていた」と言うのが自然であろう。そのため、仮に「忘れていた」の「省略」であれば、「明日約束がある」となってタが現れない。そこで、日本語で使用されるタを導き出すために時制の一致を仮定するならば、さらに議論を深める必要がある。また、「『明日は会議だ』と言った」等が根底にあり、「言った」の部分が省略されて埋め込んでいる文のタが埋め込まれた文のタと融合したといった説明も可能であろうが（寺村1984:339）、その場合、上位の省略される動詞が（(25) 等のように）「言う」であるとは限らない。本論では、（想定の方としては類似しているが）得た情報が記憶にあり、認知的な情報検索が過去の方に向かうことからダイレクトにタが現れると考えておく。

2.2.3. 「買った, 買った！」

続いて以下の例を見る。

(26). 「買った, 買った！」

(26) の話し手が、ある商品を手に入れた喜びを表現していれば、タは単に過去を表しているといえる。しかし、たたき売りをしている人物が、商品を眺めている人々に (26) を言っているとすれば、「買う」という事象はまだ成立していないことになる。そこで、タの使用が問題となるが、このタは、話し手が仮定する世界において、「買う」という事象がすでに過去のことから現れていると説明することができる。そして、仮定された事象を威勢よく命令調で述べることによって、その事象を現実世界において実現させる希望が表されていると理解できよう (寺村1984, 安藤1986)。



このようなタの使用は場面としても文法構造としても限定されているが、命令的なもの以外でも、事柄の実現を確実と見て、先回りして表現する場合がある。例えば、「よし、買った！」や「勝負あった！」(安藤1986:195)といった例があげられる。これらの例も含めれば、事象が実現する希望を表しているというより、むしろ、確実な事象として想定を述べているとまとめることができよう。そして、(26) のようなタは、「しばしばぞんざいな感じ」(寺村1984:341)を伴う「品位の低い、乱暴で勢いのある」(金水2000:60)表現ととらえられているが、特に(26)などのように相手が意思をもって判断することによって初めて成立する事象を、成立することが確実な事象として話し手が決め付けているから、「高飛車」(安藤1986:183)とも感じられるであろう。

なお、このようなタは「緊迫した状況」(寺村1984:341)で使用されるという指摘があるが、その印象は、仮に、実現されないとすると、「どいた, どいた」ではぶつかってしまう、あるいは、「買った, 買った」では売れ残ってしまう等、実際の場面として困った事態が生じることが理由と考えられる。また、聞き手に「誰がどいたの?」「誰が買ったの?」等という批判的な疑問を持たせないようにするための、緊迫感を出す発声も影響しているであろう。そして、「勝負あった」は、述べられる事象の実現に対して確信が必要であるため成立するぎりぎりまで述べることができず、その一方で、実際に実現すればその時点で明白な事実で過ぎなくなってしまうから、発話状況において事態は緊迫しているであろう。なお、「勝負あった」に対する「勝負ある」に関しては、現在、勝負が存在しているという解釈では意味不明であり、また、仮に「ある」が未来の存在を表すとすれば、(ドローも含めれば)試合がある限り勝負があるのは当然であるため不自然である。それに対して、「よし、買う」は可能であ

るが、やはり「よし、買った」とはニュアンスが異なると思われる。これは、客がいくら「買う」と宣言したところで、売り手が了承しない限りは事象が成立しないことと関わりがありそうである。

「買った」は、例えば、他の人に買われてしまうことを避ける等の理由で了承を先取りしていると考えられる。その場合にも、相手に決断を押し付けることになるため、やはり横柄な感じがするであろう。

3. 効果、および副作用

3.1. 過去の位置

(24) で使用されているようなタが話し手の情報検索に由来していることから帰結するが、相手が情報を持っているという想定だけを理由としてタを使用することはできない。

(27). 「奥さんのお名前は何でした？」

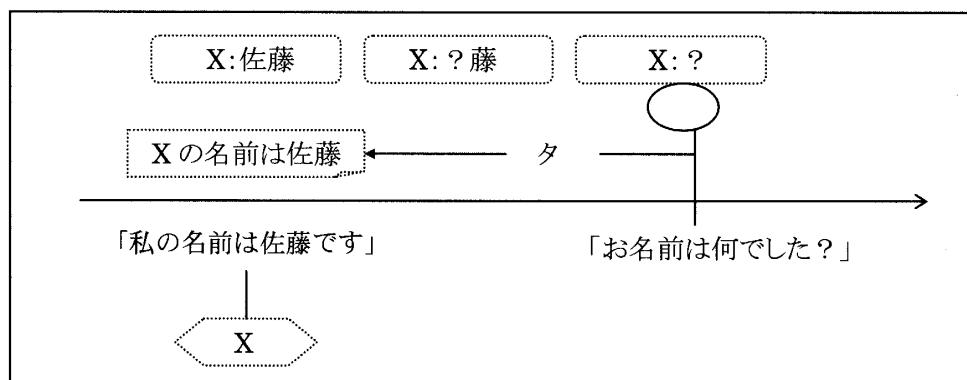
(27) の聞き手は、当然、自分の配偶者の名前を知っているであろうが、ここではタが使用されているため、話し手もまた、以前にその名前を知る機会があったと推論できる。そこで、聞き手が以前に話し手に対して配偶者の名前を伝えたことがなかったとすると、話し手は、聞き手以外の第三者から、あるいは、配偶者自身から名前を知らされたことになるだろう。その場合、当の配偶者がよほど有名人でない限り、配偶者の挙動、あるいは、配偶者と話し手との関係が疑われる可能性がある。さらに、聞き手が話し手を知らない場合には、自分の配偶者の名前が赤の他人に知られているだけでなく、自分自身が配偶者と婚姻関係にある人物として知られていることになるだろう。なお、「有名人」であれば、本人から直接名前を聞いていなくても、その名を知っていることが多いため、あえて「お名前は何でしたか」と尋ねることによって、相手を持ち上げることも考えられる。

過去を表すタを使用した場合には、現在における含意をキャンセルできることもすでに検討してきた。

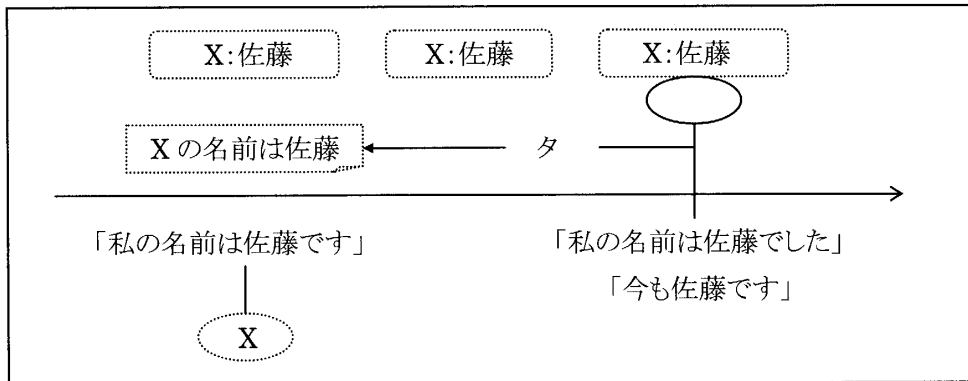
(28). A: 「お名前は何でした？」

B: 「佐藤でした」

(28) に関して、まず、A が B の名前を伝えられた過去の出来事を検索しながら、現在の情報を求めていると考えれば、タの使用に問題はない。

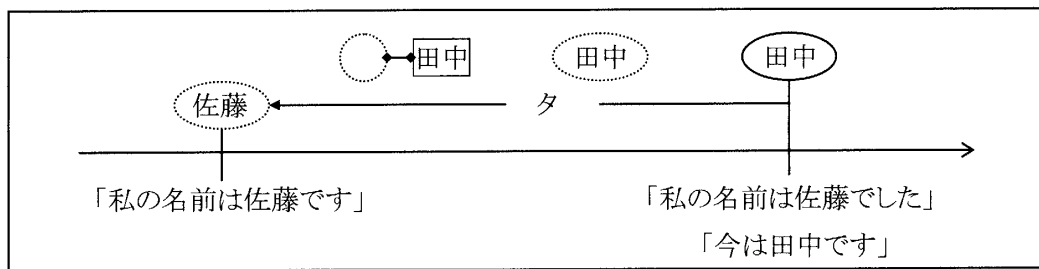


ところが、Bの発話は、仮にその名前の主が第三者でなく、聞き手のBであればめったに生じないであろう。話し手は、通常、自分の名前を思い出すのに、わざわざ過去の情報をしないからである。それにもかかわらず、(28)のような答えが出された場合、名前を尋ねた人物は、相手がタを用いて答えた理由を想像するであろう。そこで、考えられるのは、タを使ったことを皮肉る言葉遊びである。その場合、「今も佐藤ですけどね」等と茶化す発話が続くことも考えられる。

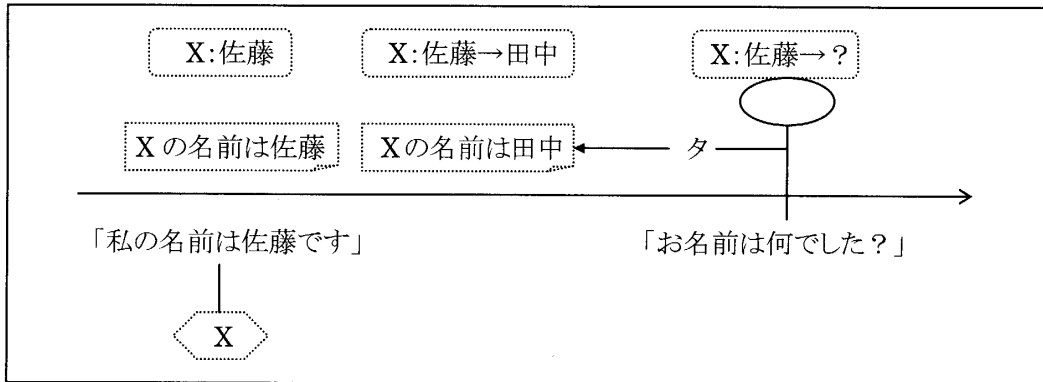


それ以外、(28)のようにタが使用される場合としては、名前が変わったという状況が考えられる。結婚、離婚等を想定すれば、以下の(29)のBは過去の名前について答えていると理解することができよう。

- (29). A: 「お名前は何でした？」
 B: 「佐藤でした」
 A: 「ええ、それで、今の名前は？」
 B: 「田中です」



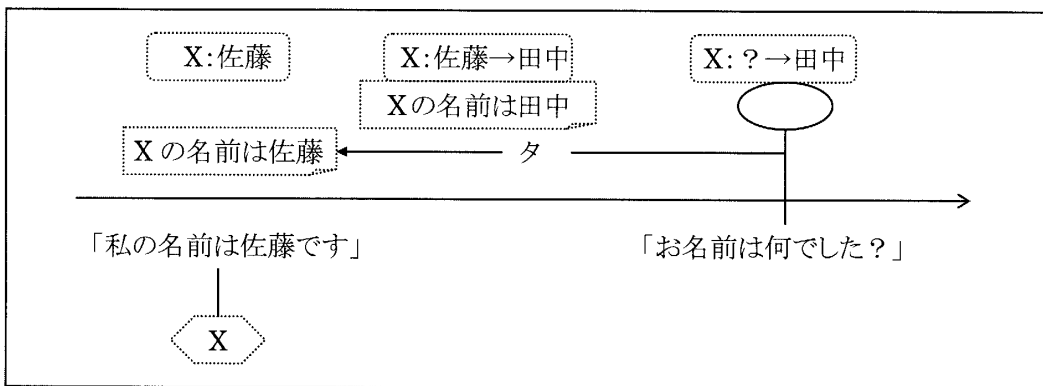
(29)で、Bは自分の過去の名前をAが知りたがっていると考えて一つ目の答えを言ったわけだが、Bが忘れていたのは、過去に知ったはずの、Bの現在の名前である。



さらに以下の例を見る。

- (30). A: 「お名前は何でした？」
 B: 「田中です」
 A: 「ええ、田中さん、それで、結婚する前の名前は？」
 B: 「佐藤です」

(30) の B の一つ目の答えでは、現在の名前が伝えられているが、A が最初の質問で求めているのは、結婚前の名前である。



つまり、(30) における A のタは、情報が得られた過去に検索が向かうから使用され、(29) における A のタは、表される状態が過去のものだから使用されているといえる。役所等であれば、(29) (30) のような、ちぐはぐな会話もありうるだろう。

タを用いた情報確認は、当該の情報に変更されない場合には問題なく通用することが多いが、過去の設定がずれると情報が異なる場合には、誤解が生じる可能性がある。(27) や、(28) から (30) の一つ目の発話は、話し手が聞き手の過去の名前を知りたがっている場合にも、現在の名前を思い出せない場合にも使用されることが考えられ、聞き手の方も、どちらの設定を想定するかによって違う答えを言うことになる。また、過去の知識として相互に持っている（と想定している）知識が異なる場合にも、誤解が生じることがあろう。例えば、話し手が、聞き手の名前が変わったことを知らず、その一方で、聞き手が現在の名前しか想起しない場合、話し手がその答えに驚くことがあるかもしれない。さらに、名前の変更（を伴う事象）が聞き手にとってタブーである場合には、タの使用に対して

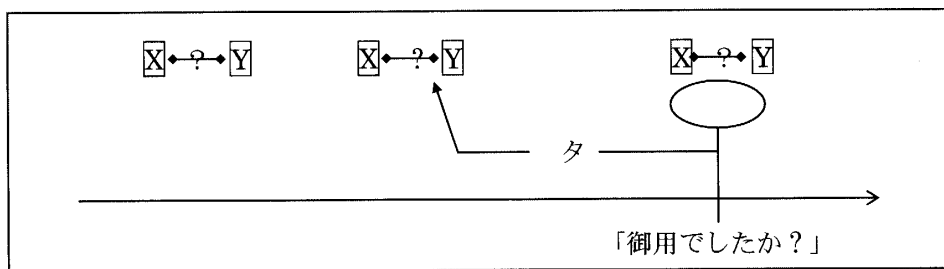
聞き手が過敏に反応する可能性もある。そのため、「お名前は何でしたか」と尋ねることには気が引けるであろう。しかし、もし話し手が聞き手からすでに以前の名前を聞いていれば「お名前は何ですか」とも尋ねにくい。結局、ダブルバインドに陥ることになる。

3.2. 現在との距離

続いて以下の例を見る。

(31). 「何か御用でしたか？」

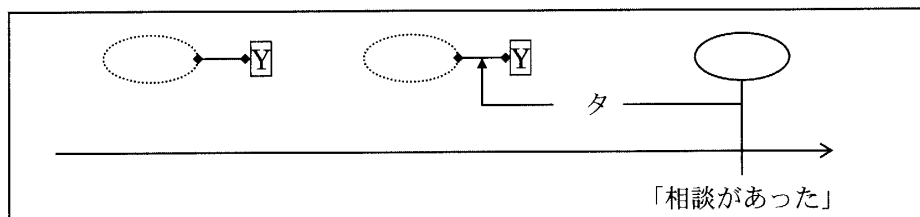
(31) の聞き手を X, 「御用」を Y とすれば, 以下のように表示できる。



ここでは、商店の店員が客に対して発話している場面を考えるが、(31) を発話する話し手が知りたいのは、発話時において聞き手に「御用」があるかどうかであろう。つまり、話し手としては「何か御用ですか」といっても同じことである。それにもかかわらず、(31) であえてタが使用されているのは、以前から用事があったはずの客に対して、そのことに（気づくことができず）対応していなかったことを詫げる等、過去の状態が話し手の視野に入っているからだと考えられる。また、(31) のタは、「用がある」という状態が過去であったことを表しているに過ぎないと理解することも可能である。そのため、客としては、もともと見ているだけであった場合にも、「やっぱりいや」等と、あたかも「用があった」が「今はない」という振りをすることができる。なお、客の側も (31) の答えにおいて「X が欲しいんですが」でなく、「X が欲しかったんですが」等と、タを使用して現在における事象として直接述べないことがある。そして、タを使用した方が、現在に関する推論の取り消しが可能であるため丁寧であると感じられる。

以下の例も同様である。

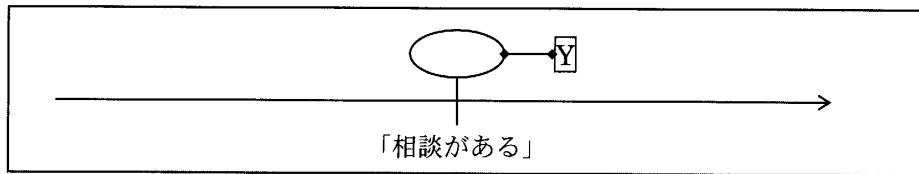
(32). 「ちょっと相談があったんですが」



ここで Y は「相談」を表している。

(32) は以下にあげる (33) よりも少し丁寧に感じられるであろう。

(33). 「ちょっと相談があるんですが」



(33) では、話し手に発話の時点で相談があることが明確であるのに対して、タを使用した (32) では、発話の時点で相談があるとは限らない。つまり、(32) では、発話の時点で話し手にもはや相談する必要がないこともありうるわけである。安藤は、タによって「今は別に固執していないので」、「撤回してもかまわない」(安藤1986:194) ことが伝えられるとしているが¹⁹、(32) では「今は別に相談に乗ってもらわなくてもよい」という含意が導き出され、相手としては否定的な答えを返しやすくなるであろう。

以下の例に関しても、タがもっている現在に関する推論のキャンセル可能性を利用して丁寧さを表しているのとらえられなくはないであろう。

(34). 「ご注文は、こちらでよろしかったでしょうか？」

(34) のタは、注文が行われたのが過去であり、その時点の情報を検索して確認するためタが使用されたと理解するのが自然であろう。しかし、(34) に関しては、多少なりとも丁寧さがある(と話し手やマニュアル作成者が思っている²⁰) ように感じられる。それは、「よろしいでしょうか」と言った場合には、現在の事象に関する判断が尋ねられるのに対して、「よろしかったでしょうか」であれば、過去における事象に関して尋ねていることになるからであろう。つまり、尋ねられた側としては、過去の注文としてはよいのだが、出された品物は気に入らないと否定する余地が残されていると感じられる。

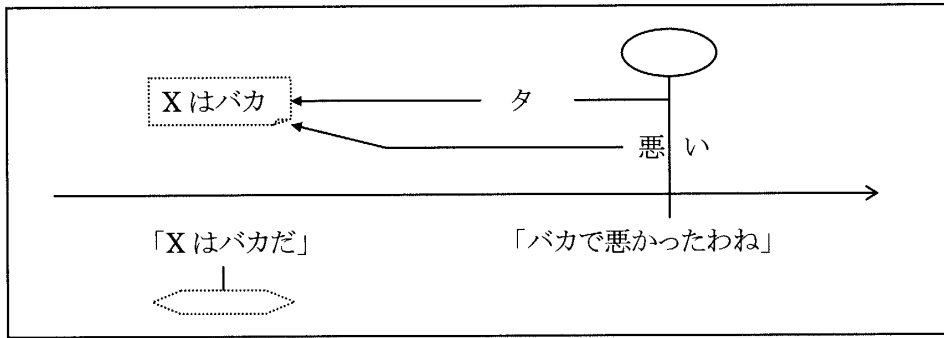
続いて、以下の例を見る。

(35). 「バカで悪かったわね」

(35) では「ね」が使用されており、この「ね」が相手に同意を求めするために使用されているとすれば、当該の命題内容は聞き手に知られたものである。そこで文脈を考えれば、(直接「バカ」ということばが使用されたとは限らないが) (35) の話し手が相手にバカであると言われた状況が想定できる。

¹⁹ なお、安藤では、タの使用が「依頼を間接的に、したがって儀礼的にする」(安藤1986:194) とされているが、そのように感じられるのは、依頼でない、単なる過去の事実としての解釈が許されるからである。

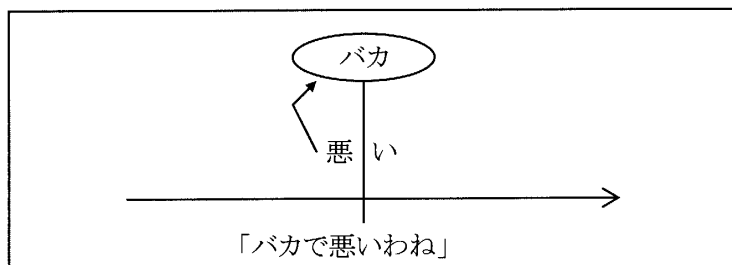
²⁰ マニュアルが書類として記されているとは限らないが、「よろしかったでしょうか」「よろしいでしょうか」以外に、「よろしいですね」と言い放って即座に下がってしまう対応も含めて、店によってある程度決まっているようである。



この表示からもわかるように、過去に位置づけられている内容は単なる情報に過ぎず、話し手が真であると主張したものである必要はない。そして、過去を検索して情報を思い出す時にタが使用されることを考えれば、むしろ、現在の話し手にとって真偽が疑わしいからこそ、過去の記憶をたどる必要があったと考えることもできよう。(35)の話し手は自分がバカであることを認めていないという印象を受けるのは、もともと「バカ」という属性付与を行ったのが話し手ではなく、また、評価されているのが発話時の話し手でもないからだといえる²¹。それに対して、タを使わないと話し手が命題内容を認めていることになってしまう。

(36). 「バカで悪いわね」

(36) の場合には、直接、話し手の現在の状況を指示して、「悪い」という述定が行われている。



このように、タを使用することによって、発話内容を、現状（に関する話し手の認識）と切り離すことができる。

続いて以下の例を見る。

- (37). A: 「ほら」
B: 「これ欲しかったんだ」

ここでは、Bが「欲しかった」という表現を使用しているが、「ようだ」や「みたいだ」等が続かない限り、表現されている欲求を持つ主体は話し手以外に想定できない²²。そこで、BはAが差し出した

²¹ 「バカで悪かった」といえば、バカという属性を自らのものとして認めているように思われるが、バカと評価される自分は過去に位置づけられているため、現在は（少なくともバカであると認識できるくらい）バカではないことが示唆されると思われる。

²² 「欲しかった」のようにタであれば話し手以外が主体でも「自然な、'文法的'な文である」という指摘があるが

ものを現在でも欲しがっているのが問題となる。Bが現在も欲求を持っていれば、タを使用せず「これ欲しい」と言うこともできるからである。しかし、「欲しい」と言った場合、その欲求は見せられた後で生じたと判断されるのに対して、「欲しかった」と言えば、その欲求は見せられる以前から成立していたと理解される²³。そして、現在でもその欲求があるとすれば、継続している時間的な長さといまいって、タを使用した場合の方が、その欲求が強く感じられる。さらに、タが使用された場合、過去に抱いていた自分の欲求が理解されていたという嬉しさが感じられるかもしれない。ところが、「欲しかった」と言われる場合には、欲求がかつて生じたものの、その後、気が変わったり、諦めたりして現在は欲しいと思っていない、あるいは、すでに買ってしまったから、欲しいという欲求がなくなっているということもある。イントネーションや、付加される語尾によっては、「欲しかった」によって、(手に入れてしまったから)残念だという感情も理解されるだろう。さらに、タが使用される場合、「欲しい」という欲求がなくなった時点が、発話の直前ということも考えられる。つまり、対象が差し出された時点で、Bがもらったものとみなして、欲求が満たされたと判断したからタが現れたのかもしれない。その場合、もし、話し手が単に見せるだけのつもりであったら、気まずい状況になるだろう。

3.3. タとテイル

すでに、(25)において、「帰らなかった」という表現について検討したが、同じ場面で「帰っていない」と言ってもほぼ同じ内容が理解されると考えられる。同様に、以下の例でも、太郎がちゃんと家に着いたか心配でBに電話をかけたAとしては、どちらを聞いても必要な情報が手に入ったと感じるであろう。

- (38). A: 「太郎君、帰った？」
 B: 「うん、帰った」 / 「うん、帰ってる」

「帰った」と言う場合には、過去において太郎がBのところに着いたことが示され、また、「帰ってる」と言う場合には、太郎が過去に着いたうえで、その結果となる状態が保たれているはずである。いずれにしろ「帰った」ことは確かであり、そのため「うん」と答えられている²⁴。しかし、Aが太郎と話したいと考えていれば、「帰った」と言われた場合にその欲求が満たされない可能性がある。「帰った」なのであっても、再度外出していることがあるからである。それに対して、「帰ってる」では太郎が現在家にいることになるため、断られない限り話すことができるだろう。

以下に類似した例を挙げるが、これは、タが完了の意味も持ちうるという議論でよく使われている。

(寺村1984:348)、(特に日常会話では)その判断が日本語話者の中でも揺れると思われる。

²³ 安藤は、「一度は着てみたかった」(安藤1986:197)に関して、「まだ着ていないのであれば、『一度着てみたい』と書いたはずである」としているが、着ていなくてもタを使用することは可能である。なお、扱われている文脈では、実際に着た状態で写っている写真があるため、着たのは当然であり、その点で、「なぜ着てみたかった、と過去形なのか」と両親がいぶかったというのは(実際そのような記事であるとしたら)確におかしなことである。しかし、それはタが過去を表すと考えたから生じた誤解(だから完了と判断すべき)だという安藤の説明は当たらない。

²⁴ 井上は、タとテイルを比較して、「『シタ』を用いるためには、出来事が実現された経緯(少なくともその一端)を具体的な形で把握していなければならない」(井上2001:104)としている。ここで検討している例であれば、「帰った」の場合には、家に入るところ等を見ており、「帰っている」の場合には、現在部屋にいることを知っていればよいということになる。

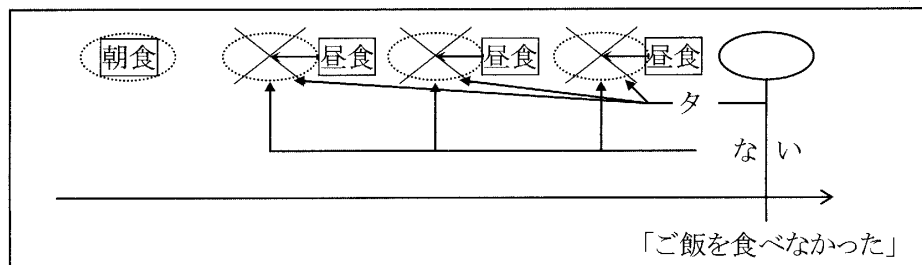
(39). A: 「ご飯食べた?」

B: 「いや、食べなかった」 / 「いや、食べていない」

Bの一つ目の答えが求められる場合には、Aで使用されているタが過去を表しており、Bの二つ目の答えが求められる場合には、Aのタが完了を表しているというのがその議論の趣旨である。

ところで、過去の事象に関する疑問の答えは、過去に属するいずれかの時点で一度でも当該の事象が生じていれば肯定、一度も生じていなければ否定となる。(39)のAの場合には、「食事をする」という事象の、いわば存在量化が成立したかどうかを問うていることになる²⁵。そのため、発話の時点以前で「食べる」が成立していたら、(39)のタを完了と理解しても、過去と理解しても、Bの答えは「うん(はい)」となり、それに続くのは「食べ(まし)た」であって、「食べている(食べています)」ではない。すると、タが完了を表すという理解が生じるのは、「いいえ」が答えになる場合に限定されることになり、肯定と否定の関係には相補関係がないことになってしまう。しかし、後続する発話によって、先行する発話における表現の使用が定まると仮定しなければ、このような結論を出す必要はない。Bの二つの答えは、Bがどのような状況にあるかに関わっているのであって、先行するAの表現形式から独立していると考えれば、Aにおけるタはやはり過去を表していると判断できる。

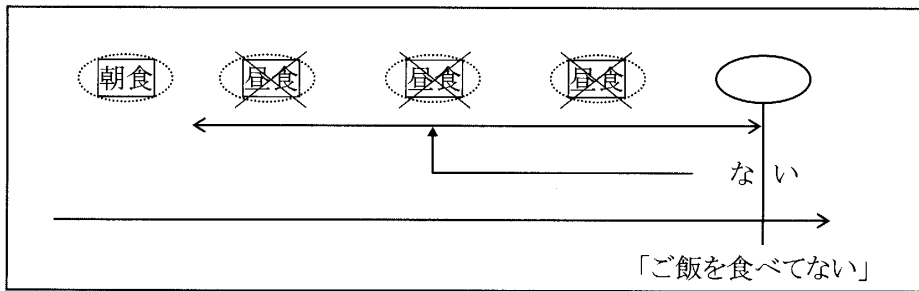
さて、Aの質問が純粹に過去における事象の存在量化を問題としているのであれば、Bがそれにことばで答えることができるほど成長している限り、食事をしたことがないとは考えられない。つまり、答えは明らかに「はい」となってしまう。そのため、Aの発話が成立する場合には、文脈によって量化の範囲が限定されていると考えるべきであろう。そこで、発話時に含まれる「今日」の朝にBが食事したことをAが知っているという文脈を考えてみる。その場合、当然、Aはそれ以降における事象の成立を尋ねていることになる。さらに、ここで(39)の会話が12時10分に行われたとすれば、「食べた」か尋ねられている食事は昼食と仮定できる。すると、Bの一つ目の答えでは、(朝食以降の)過去のいずれの時点でも「食べる」という事象が成立しなかったことになる²⁶。



それに対して二つ目の答えでは、食べた結果として継続しているはずの状態が成立していないことになる。

²⁵ このようなとらえ方に関しては、住大(2005)を参照されたい。

²⁶ 「食べない」が「あった」だとすると、存在量的な解釈になり、「食べた」が事実であっても矛盾しないことになる。そのため、「食べる」が「ない」のが「過去」というより、「食べる」が「過去」に位置づけられ「ない」といった方が、全称的な否定であることがはっきりするであろう(2.1.の議論を参照)。なお、(08)で扱った「帰らなかった」も「食べなかった」と同様に(領域の限定はあるものの)全称的に否定する必要があるが、論点を曖昧にしないために(08)では簡略化した表示にとどめた。



さて、(39) の一つ目の答えでは、否定される事象である昼食が過去に位置づけられている。つまり、昼食自体は過去に存在したが、それに対する食べるという行為が成立しなかったわけである。そのため、昼食を取るに相応しいとみなされる時間（例えば12時10分）にBの一つ目の答えが発話されていけば不自然と感じられる。また、一つ目の答えを選択する話し手にとって、昼食はすでに過去の事象であるため、話し手は発話時以降も昼食をとるつもりがないと推測できる。それに対して、二つ目の答えが述べているのは現在までの食べた結果となる状態の否定である。そして、「食べない」と比較すれば明らかなように、「食べていない」という否定は現在までに限定されており、未来における事象の成立はオープンである。そのため、12時10分に質問を受けたBが「食べていない」と答えれば、それ以降に食べるつもりであると推測できる。なお、「食べていない」において否定される時間的スパンは現在で終わっているため、未来に「食べる」可能性が残されていない場合（例えば、夕食まで続く会議が12時から始まっている場合）には、一つ目の答えの方が自然であろう。このように、「食べなかった」と「食べていない」の使い分けは、発話の時間と、その時間における状況に依存していると理解できる。

4. おわりに

本論では、いずれの発話も聞き手に向けて行われているものと想定して議論を進めたが、「来た」「あった」「よかった」「買った」や「会議だった」等は、特に相手を意識していない場合にも使用される。その場合、発話は話し手の感情表出に過ぎないと理解することが可能であり、そのように理解すれば、ここであげたいずれのタもいわゆる「発見」のタに類似したものとして説明できそうである。発見した内容や評価をことばにする際には、それ以前に認識・確認している必要があり、認識・確認が「過去」に位置づけられれば、その過去に依存してタが生じる可能性があるからである。もちろんその場合にもタが「過去」を表しているという原則が保たれているが、そこから議論を始めれば、聞き手がある場合に関しても、タを使用することによって、話し手が自ら確認したことに聞き手の注意を向けさせようとしていると考えることもできる。さらに、その議論を進めれば、現在形の「Xである」は「Xであることを確認する」から生じ、「Xしている」は「Xであることを確認している」から生じるといえ、それぞれ、過去の確認を現在の状態として認識しなおしてから発話しているため感情表出的な印象がないといえるかもしれない。実際そのような印象がないわけではないため、検討してみる価値はあると思われる。

なお、本論で扱うことができたのは、単文の文末（付近）で使用される動詞・形容詞に付加されるタだけであるが、複文におけるタの解釈についてもさまざまな議論がある。現在までの分析では、複文におけるタもまた過去としてとらえることができそうであるが、その結論については次の論文まで待たれたい。また、議論において考慮に入れた文脈は、基本的に発話状況に限定されており、テクス

トにおける、タとル、あるいは、テイルとテイタが持つそれぞれの機能について議論することはできなかった。これに関しても様々な議論があるが、この件に関しては、現在形・過去形・完了形との対比で、対照言語学的に調査すればおもしろい結果が得られるのではないかと考えている。

参考文献

- 安藤貞夫 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』 大修館書店
井上優 (2001) 「現代日本語の『タ』」 つくば言語文化フォーラム『「た」の言語学』 97-163
今井邦彦 (1995) 『英語の使い方』 大修館書店
柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社
金水敏 (2000) 「時の表現」 金水敏(他) 『時・否定と取り立て』 岩波書店 1-92
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
住大恭康 (2005) 『不定冠詞付き名詞句の多様な解釈とテキストの整合性に基づく脱曖昧化』
(獨協大学大学院研究報告集『BRÜKE』 第18号 別冊)
住大恭康 (2006) 「『過去形』の機能 —日本語のタと英語の過去形に関する一考察—」 『言語と人間』 第8号
寺村秀夫 (1984) 「‘タ’の意味と機能」 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 313-358